

秋田と東北地域の観光とインバウンド誘致対策について

飯田 謙一

1、はじめに

専修大学社会科学研究所の2018年度夏季合宿調査が、9月3日から7日の4日間、昨年9月に実施された“北前船の足跡をたどる”をテーマに、北海道の寄港地である小樽、江差、函館の地を訪れ実施した“実態調査”の継続調査として、今回は北前船の日本海側での主な寄港地が存在した秋田、山形、新潟3県で、北前船に関係した史跡や、北前船に関する文献や関係資料を収集・保存し、現在公開している上記3県の資料館、並びに北前船を活用して活発な商取引を行っていた各地元の商家で、現在一般に公開され、そこで行われていた商取引の情報を提供している旧商家を訪れて、北前船に関係した様々な事柄を、詳しく調査するための継続調査として実施された。

此度の実態調査は、まず初めに秋田県において北前船に関係した情報を入手する目的で、秋田市役所の観光文化スポーツ部、観光振興課を訪れ、秋田市で北前船に関係した史跡や史実に関しての説明を受けた。秋田で北前船が主に寄港し、特産品の秋田杉や米、それに農産物や海産物などの特産品を運び出し、当時秋田で自給できない木綿、古着、塩、砂糖、紙などが運びこまれる港として、年間入港する船は600艘を超え、12軒の廻船問屋で賑わったと言われているのが、雄物川河口に位置した土崎港であった。

その港があった土崎地区には、2018年3月に開館した秋田市土崎みなと資料伝習館が建設され、北前船に関係する様々な資料が保存展示されている。その館内には土崎神明社祭で使用される大きな曳山が展示されているが、曳山は北前船により運ばれて来たと言われている。資料館では北前船に関する様々な資料を見学することが出来た。同時に学芸員から北前船に関係した事柄について詳細な説明を受けた。

その他、秋田市には北前船に関係した土崎神明社、高清水の丘の五輪塔、金毘羅神社、虚空蔵尊堂、嶺梅院、御旅所などの史跡が現存している。

北前船寄港地の調査を継続して実施するため、次に、我々は北前船の寄港地として、繁栄を極めた山形県酒田市を訪れた。酒田港は信濃川河口に位置する良港であった為に、多くの西回りの北前船がこの港を活用して、酒田からは庄内の米や出羽の紅花を京、大阪方面に運び、その帰りには紅花で染めた京友禅や、その他当時必要とされた様々な生活用品の運搬や取引を行うなど、多種多様な物品の取引の要の役割を果たした。

酒田港は信濃川の河口にあり、日本海を北上また南下する西廻り航路の北前船にとって、大変重要な中継地としても不可欠な働きをした。また庄内平野特有の“山瀬”や、海から吹き付ける強風の際には風よけの港としても利用され、その地域では大変重要な働きを果たして栄えた。信濃川河口に位置する山形の酒田港のある酒田は、東北地方の米どころ庄内平野で収穫された多量の米を、信濃川を利用して運搬しそれを集積する土地であったため、北の国一番の米商人と言われた“旧鎧屋”の米取引を主とした各種商業活動や、自ら北前船交易に積極的に乗り出して財を成し、日本一の大地主となった豪商本間家の下で、北前船を活用し繁栄を誇った土地といわれている。そのため酒田市には北前船に関係した史跡や、資料が多く存在した土地と言われているが、昭和51年10月の大火に見舞われ、残念なことに北前船などに関した建築物や史跡、それに貴重な資料の多くが消失してしまったと言われている。しかし今日でも日和佐山にある日枝神社や旧鎧屋（あぶりや）、本間家旧本邸や現在本間美術館となっている本間家の邸宅跡、それに唐門のある浄福寺はじめ、再建された歴史的建物などが残されており、北前船で栄えた酒田の当時の繁栄を伝える建造物や、また大火でも焼け残った貴重な資料などが、市の資料館などに残されていると言われている。

酒田市では北前船に関する資料を保有し、それを一般に公開している酒田市の資料館を訪れ、北前船と大変関係の深い酒田港や、酒田市に関する展示資料を見学し、館長と学芸員から、北前船などに関して大変詳しい説明を受けることが出来た。大火により貴重な資料を消失してしまっただが、その後も資料館では現在も資料収集の努力を行っているとの事であった。資料館で説明を受けた後、酒田で北前船の商いを代々手広く行っていたと言われる旧鎧屋（あぶりや）住宅を訪問し、市の学芸員や関係者から同家が北前船を活用して、長年にわたって現地で行っていた取引の実態等に関して、建物内を見学しながら説明を受けた。ここでの家屋の見学や学芸員の解説で、この土地で鎧屋とそれに藩主以上にその財力を誇った豪商本間家、ならびに現地で北前船を利用して、大きな経済力を維持していた豪商たちの力の大きさを理解することが出来、酒田や周辺地域で過去に北前船が果たしていた、経済的な影響力の大きさを再認識させられた。

資料館や旧鎧屋を見学した後、我々は酒田と北前船の関係を今日でも物語る日和山公園を訪れ、日枝神社や公園内に残る歴史的な建物などを見学した後、山頂の高台から信濃川と、北前船の著名な寄港地であった酒田港と日本海を眺めた。さらに現在公園の池に浮かべられている北前船の現物を縮小して制作されたレプリカを見学した。また酒田が北前船の寄港地として重要な役割を果たしたことを示す、現在も現役として使用されている、米穀の巨大な保存倉庫である山居倉庫の倉庫群を訪れた。その現存する沢山の倉庫の数と、規模の大きさから酒田が庄内地域の穀倉地の中心として、過去そして現在でも変わらずに果たしている機能の重要性を実感

しながら、酒田港と北前船が果たしてきた機能を改めて認識した。

今日でも、北前船が酒田の地に大きな繁栄と、影響を与えたことを物語る史跡や数々の貴重な資料が残されており、筆者は北前船がこの地の経済活動になくはならない存在であったことを、このたびの調査に参加して改めて認識した。

此度の調査の最終日、江戸時代後期に米穀商を営み、明治時代初期に廻船経営、その後米問屋、運送、倉庫、石油商などで、新潟を代表する商家であった旧小沢家住宅を訪問して、当時の豪商といわれた小沢家の建物内部の特徴に関して説明を受け、さらに北前船と新潟の関係を物語る、全国各地の石が使用されている庭を見学した後、市役所の学芸員や関係者から家屋に関して詳しい説明を受けた。

この度の夏季調査に参加して、秋田、山形、新潟の三県に所在する北前船に関係した史跡や資料館と、北前船に関係した旧商家など訪れ、北前船が上記3県の寄港地で果たした経済や文化的な影響力に関し、多くの知識を得ることが出来て有益であった。

2、北前船と秋田市の観光

ところで、昨年度調査を実施した、北前船の北海道の寄港地の小樽、江刺、函館の調査に続いて、本年は北陸地域の北前船の寄港地に関する情報を収集する目的で、最初に秋田市役所の産業企画課を訪れ、現在の秋田市の行政に関する説明を受けた後、特に北前船と関連した市の観光に関して観光文化スポーツ部、観光振興課で主席主査の渡部美和子氏から様々な情報の提供を受けた。

北前船遺産を観光誘致に活用することに関しては、日本海側の北前船寄港地と、船主集落の11市町が、2017年4月に日本遺産認定地として国に認定されたのを機会に、最初に認定された11市町が集まり、各自治体の北前船に関係する歴史や、行事それに文化財などの紹介を相互に実施した。また各市や町の文化や関連催事の紹介を行い、さらに相互に連携してホームページの公式ウェブサイトや、ガイドブックを作成し、それらを相互に紹介する活動を行った。

さらにその後、2018年5月新たに27か所、そして現在は38の市や町の自治体の加盟が追加認定され、秋田県では能代市、男鹿市、由利本荘市、にかほ市等が北前船寄港地として認定されたので、今後これらの各市と協力して活動するとの説明を受けた。

秋田市では第二次大戦の終戦直前、秋田空襲で北前船などに関係する歴史的建造物などを焼失したので、北前船寄港地として日本遺産に認定されたのを機会に、港のあった土崎地区に秋田市土崎みなと資料伝習館を建設し、今年3月に開館して、①北前船に関係する様々な資料や、ユネスコ無形文化遺産の土崎神明社祭の曳山行事で使用される、大きな曳山を保存展示して一

般に公開し、市の観光ルートとして活用している。また今年度は、②北前船寄港地“あきた”をめぐる“パンフレット”を作成して積極的に紹介したり、北前船の実物の10分の1(3メートル)の模型を作成する。また③ホームページを作成し紹介する、さらに外国人向けに英語版のwebsiteを作成し、海外にも積極的に紹介する活動を行っている。さらに④北前船に関する歴史の語り部(英語ガイド)の養成などを、来年度までの3か年の国の補助金を積極的に活用して行う。また平成31年度に向け、交易ルートを商品化して売り出す計画をしている。現在インバウンドを取り込むために、国際線航空機内で秋田の観光紹介を、国内各地において秋田竿燈祭りなどと同様に、秋田を積極的に紹介する活動を実施しているとの説明を受けた。

北前船に関する説明と同時に、秋田市でも近年、訪日観光客を誘致する活動を積極的に行っているとの説明が、観光振興課の渡部美和子氏からあった。話は近年、外国人訪日観光客が毎年急速に増加していることに関する話題で、秋田市もこの動きの一環として、インバウンドの誘致に努力していることに関連した話題であると筆者は理解した。これは日本政府が訪日外国人観光客の誘致を積極的に行っており、特に2020年の東京 Olympicに向けた観光政策として、インバウンドを積極的に誘致する政策が実施されているのに関連させて、国内全ての自治体に、インバウンドの積極的誘致を行うよう要請しているからである。^{注1)}

その結果、年を追って訪日外国人観光客が急速に増加している。政府はこの急増するインバウンドを東京・大阪の大都市や、京都、広島それに世界遺産として認定された高野山、伊勢など、インバウンドが集中して訪れる一部地域だけでなく、全国の各地方観光地や地方都市にも分散させ、受け入れる政策を積極的に行っている。^{注2)}

この政府の外国人誘致の方針に従って、最近、全国各地の地方自治体ではインバウンドの取り込みを積極的に推進する活動を実施している。特に観光庁は東北6県へのインバウンドが少ないことに注目し、インバウンドを東北地方の県や、自治体に誘導するための政策を近年特に推し進めている。その観光政策の一環として秋田県や市は、現在インバウンドの誘致に努力していると説明があった。

現実には東京・大阪等の大都市や、歴史的建造物や観光名所が多数存在する京都、奈良や世界遺産登録がなされた、ゴールデンコースといわれる観光地などにインバウンドが集中して訪れているが、秋田や東北地域を観光で訪れるインバウンドは、訪日が2~3回目の人々や台湾、中国、韓国などのチャーター便が運航されている一部の地域のごく限られた観光客が、秋田での竿燈祭りや、大曲の花火大会、秋田犬の大館、そのほかに東日本大震災の後、東北地方で仙台を中心として開催されている東北六魂祭などの機会に、秋田を訪れる観光客が主であり、我が国の中でも東北地方や秋田にはインバウンドの数が、最も少ないと言われている地域である。その主な理由として、東北地方では仙台以外は東京や他の大都市からの交通の便が悪い。積極

的に観光客を誘引する観光地や、観光客をひきつけるイベントが少ないなど理由がはっきりしているからである。

東北地方は、このような理由から日本人の観光客ばかりでなく、インバウンドの観光にも消極的な要因があると言える。しかし東北の各地域や秋田県や市でも、国内各観光地や日本全体の地域での様々なイベントを活用し、観光客誘致に積極的な努力をしている。だが成果はまだそれほどあがっていないとの説明があった。

このように不利な条件下でも秋田市では、秋田観光コンベンション協会などが、中心となり実施している観光活動に対して、その組織の実行委員会の実務に積極的に参加して、観光行事を盛り上げるために、秋田駅を中心とした秋田市の市街地の中心部に、賑わいをもたらす目的で、週末に各種イベントを積極的に開催し集客努力をしている。また以前は各市町村が別々に開催してきた各地域の祭りや、催事を同時開催するなどして、オール秋田の方向で各種イベント開催し、秋田県での観光を盛り上げる努力を行っているとの事である。また秋田県や市は東北6県と協力して、観光客を東北地方に積極的に誘致する活動を行い、東北各地の観光への集客にも協力を行っているとの説明があった。

ところで、秋田市は北前船遺産の活用を促すため、北前船寄港地の秋田港として積極的に紹介する目的で、歴史遺産に関する各種のパンフレットを作成するだけでなく、積極的に秋田港を利用するクルーズ船の誘致にも、現在努力しているとの説明もあった。

その理由は、すでに九州地域では大型のクルーズ船が多数入港して、多数の訪日観光客が現実にクルーズ旅行を楽しんでいる。クルーズ船に関しては、秋田市の秋田港には我が国の5-600人乗船するクルーズ船がすでに寄港している実績があり、外国からも2-3000人が乗船する大型クルーズ船が入港可能な能力を持っている。また既に外国の大型船が入港した実績もあるので、国と秋田市では外国からのクルーズ船の訪問の誘致に、積極的に努力している。その結果すでに2018年には大型船の入港があり、この後も入港を予定している船が多数ある。また今後さらに大型観光船の入港を積極的に促すため、すでに大型埠頭の建設が2018年4月に完成しており、また乗船客用のターミナルもすでに建設済みで準備が整っているとの説明があった。

また、この事と関連して港から既存の貨物専用線を利用して、秋田駅まで乗船客専用列車(クルーズ列車)を、JRの協力を得て運行するなど、今後はより多くのインバウンドを受け容れる準備をしているとの事であった。

3、秋田市のインバウンド招致活動、

観光庁は、東北地方6県にインバウンドを積極的に誘致する計画を立てており、具体的には、

東北6県見るもの・食べ物・買い物100選の発信をして、東北地方の祭り、景勝地・郷土食・地酒など地域を代表する観光資源を選定した「東北6県見るもの、食べ物、買い物100選」について、官公庁や日本政府観光局のウェブサイトを活用して、国内外に向けて情報発信をしている。またツーリズム EXPO ジャパン等のイベントにおいても情報発信をしている。更にこの動きを加速するため、東北観光復興対策交付金による重点的な支援も実施している。またホストタウンの推進及び海外への情報発信の支援。観光産業を確たるものとして、国際競争力を高めて、我が国の基幹産業にしたいとの政策を推し進めている。

これらの動きや考に対して、秋田市も市内での各種イベントを積極的に開催している。また従来地域単位で個別に実施されていた祭や行事を統一拡大実施するなどして、国内外の集客を高める努力を行っているとのことである。また東北地域の中心である仙台市や山形の酒田市、それに各県の有力観光地等と協力して、東北各地域への観光客の誘致を積極的に行うため、様々な努力を実施しているとの事であった。しかし東京や大阪など大都市が存在する関東や関西地域、それに中国や韓国に近い九州などと比較して、インバウンドを積極的に引き付ける有名な観光地や観光イベントが少ない。また東京や大阪、京都など関東や関西・九州と比較して、来日しても交通アクセスが悪く、訪れるのに不便な点が多く不利である。また空港なども全体的に開発が遅れており、国際線やチャーター便が少ない。このように不利な条件が多いので、秋田や東北地域に観光で訪れるインバウンドも当然限られてくる。様々な点で観光に不利な条件が多く、東北を訪れるインバウンドは結果的に少数となる。近年、台湾、中国、韓国等から直行便や、チャーター便が運航され始めたが、しかしこれら国々の限られた観光客が竿灯祭りや、近年の秋田犬の人気拡大、東日本災害後、東北六県で共同開催される六魂祭等の機会に、秋田にも以前より多く訪れるようになったが、現在も秋田や東北各地域は、我が国でもインバウンドの数が、最も少ない地域と言われている。

ところで、我が国は現在、2020年開催のOlympicを目標に、上に述べた如く政府が積極的なインバウンドの受け入れ方針を打ち出している。従って様々な形の後押し援助を実施しているため、多くの自治体が政府の補助金政策を利用して、インバウンドを積極的に誘致するため様々な活動を精力的に実施している事が、新聞や各種メディアを通して報じられている。そして筆者の知る限り、政府の積極的な後押しがあるので、全国各地の多数の自治体がインバウンド誘致に積極的に取り組んでいる。だが東京や大阪、京都それに近年世界遺産に認定された伊勢、高野山、九州地域と以前からインバウンド誘致に積極的に取り組む瀬戸内海の地域には、不ずとインバウンドが多く訪れる地域で、インバウンドを取り込むための環境が既に整っているため、これらの場所や地域にはインバウンドが集中して訪れている。これらの地域のほかにも、近年、多数のインバウンドが訪れている場所もある。昔から飛騨の小京都と呼ばれ、江戸時代

の城下町や商家がそのまま残っている高山市なども、インバウンドが一人で歩いても楽しめるように、そして繰り返し訪れてくれる旅行者になってくれるように、地域の紹介などを多言語の地図やパンフレットを作成したり、街中の道路標識や看板は言語を限定し、景観を損なわないような努力をしている。また積極的にバリアフリーに取り組む努力もしている。またインバウンドが撮影した画像を、その場で SNS にアップロードできるようにしている。また市からは観光や災害時の情報を送れる努力もしている。Free - WiFi を市が整備してインバウンドに積極的な活用を促している。それに小京都と言われてきた飛騨高山地域や、独特の集合住宅の白川郷の紹介をする一方、利用にはメールアドレスや氏名、国名などの登録が必要なので、今後の Marketing に活かせる情報収集にもなっている。また島根県では神話の故郷の出雲大社を中心とした地域や、有名な「足立美術館」があり、そのほか西の小京都と言われる金沢市、更に太田市の石見銀山の観光を、インバウンドに一括して売り込む努力をしている。また隣接する鳥取県の砂丘観光なども協力して、一緒に売り込んでいる。同時に飛行機を利用するインバウンドには鳥取空港を、そしてクルーズ船観光には境港を活用している。最近、米子空港には香港航空が乗り入れたので、香港からのインバウンドが急速に増加している。このように様々な地域がインバウンドの誘致に努力し成功を収めている。これらインバウンドが多数訪れる地域には、日本特有の伝統や文化遺産が多く存在するなどして、インバウンドを強く引き付ける要素を持っている事が多い。このように近年、日本の各地にインバウンドが訪れ、賑わいを見せている場所や地域が多くなり、今後、日本にはインバウンドが益々増加すると考えられる。

しかし近年日本の多くの有名観光地では、インバウンドが急増した結果、特定の地域に観光客が溢れ、結果として交通渋滞が日常的に発生している。その結果国内の有名観光はどこに行ってもインバウンドが溢れ、彼らには不満が募る一方、観光地と近隣地域の住人の日常生活にも深刻な影響を与えている。観光地の住人の中には、日常生活が困難となり他に転居を余儀なくされる人達が現れ、オーバーツーリズムによる深刻な問題が発生している。このように政府の訪日観光客を増加させる政策は、ある意味で効果を上げていると考えられるが、インバウンドの一部観光地への予想を超えた急速な増加は、それら観光地に予想もしなかった深刻な問題も惹起している。

政府が目論む訪日観光旅行者の拡大計画の中には、地方との連携事業の拡大により、著名な観光地以外の地方も含めた全国各地を、インバウンドの増加により発展させようとする政府主導の観光政策により、我が国全体の経済を発展に導こうとする政策上の目論見と意図があるが、現時点では全国的な規模での成果を上げているとは言えない。

地方の観光地をインバウンドにより活性化させようとする政策は、現時点では、大都市と一部の有名観光地地域を除き、効果を上げていないのではと筆者は考える。今後はインバウンド

を地方にも呼び込み、地方の経済も発展させようとする計画は、今後の大きな課題でもありと考える。

ところで全国各地を調べてみると、際立った日本特有の文化遺産や観光名所などが存在しないのに、多数のインバウンドが訪れる不思議に思える場所や地域が存在している。それらの地域はどのようにして、多数のインバウンドの誘致に成功しているのかに筆者は関心を持った。そして全国多数の自治体が今後インバウンドを誘致する方法として、活用できる方法があるのではと考えたので、以下にインバウンドを引き付ける特徴を持った自治体や地域を紹介し、今後多数の自治体がインバウンドを誘致する際の参考になればと見え、以下にそれらの場所や地域が、如何にしてインバウンドの誘致に成功しているのか。その主な理由は何かについて述べてみたい。

現在、すでにインバウンドの誘致に成功していると考えられる観光地や、地方自治体がある。だがその数は未だ多いとは言えない。現時点でも、かなり多くの自治体が政府の援助や支援をバックに、インバウンドの誘致活動に取り組む努力を行っている。しかし上でも述べたが、現時点で東京・大阪・名古屋などの大都市や、古都の京都や奈良、それに近年世界遺産に認定された地域や、有名な地方の観光地などを除けば、インバウンドの誘致に成功していると言える地方自治体や、観光地の数はまだほんの一握りで、あまり多いとは言えない。しかし上述の大都市や有名観光地でないにも関わらず、インバウンドの誘致に成功を収めているか、徐々にインバウンドの誘致を軌道に乗せつつあると考えられる自治体が存在している。

その中からいくつかの代表的な例を取り上げて紹介してみたい。まずは北海道のスキーを中心に観光開発を行っているニセコ町。同じくインバウンドが多いと言われている長野県の白馬村。それに自然と素朴さを活かした徳島の山村の祖谷地域をその代表的な例として紹介したい。これらの地域には、インバウンドを引き付ける共通の要素があると考えられるからである。これらの地域では、初めはインバウンドが火付け役となり、彼らが SNS を使用して積極的に発信する地域紹介情報があり、その情報が次々にインバウンドの誘致に成功し、現在では SNS でその場所を知った、より多くのインバウンドがその地を訪れ、次々に情報を発信するという相乗効果を、次々に生んでいると考えられる。

そこでインバウンドの誘致に成功していると考えられる、これら代表的な場所や地域をいくつか取り上げ、インバウンドの取り組みに成功している場所や地域の具体例を紹介してみたい。これらインバウンドの誘致に積極的であり、インバウンド誘致に成功していることで知られている例として、まず初めに北海道のニセコ町でなぜ外国人が多く訪れ、彼らが長期に滞在することを希望するのか、その理由をニセコ町でその原動力となった事実を紹介する。

そこには多くのインバウンドにニセコに魅力を感じさせる大きな理由が存在する。それは初

めにインバウンドとしてニセコを訪れた人達为中心となって、ニセコ町にさらに多くのインバウンドを呼び込むための誘致活動を積極的に行った事である。すなわち彼らの積極的な誘致活動により紹介され、ニセコを訪れたインバウンドが、ニセコの魅力にはまって居住するとか、再び訪問をするようになる。またそのようにしてニセコを訪れた彼らが、次にNSNなどでニセコ町の魅力を発信するという連鎖が連続して行われ、ニセコにインバウンドが次々に集まって来るという結果を生み出したのである。

今日、ニセコスキー場は powder snow で雪質が大変よいと言われ、世界的なスキーリゾートとして世界的に知られている。その始まりはニセコを訪れ、良質な雪に魅せられたオーストラリア人がニセコに移り住み、ニセコのスキー場を海外のスキー愛好者に宣伝した。その結果多くの外国人が雪質の良い場所で、スキーを楽しむため訪れるようになった。ニセコのスキー場はニセコ町と倶知安町にまたがる場所にあり、人口は現時点で倶知安町が 1,5 万人、ニセコ町が 5 千人である。その両町を訪れた外国人観光客は両町併せて、2017 年には年間 27 万人であった。その結果、ニセコひらふ地区のスキー場には、リゾートホテルや他の宿泊施設が多く建設され、現在そこで働く外国人の若者も多数居住している。そのために冬季には住民登録をして半ば住み着く人も多く、スキー場のある倶知安町には 2018 年 3 月の時点で、約 1300 人の住民登録があった。そのために外国人向けのレストランや薬局などもあり、看板は英語表記が多いといわれている。現在では、スキーだけでなくひらふの環境の良さに着目して、外国人がニセコの土地の観光開発を積極的に進めており、外国人の居住者と観光客が毎年増加しているといわれている。このように今日では多くの外国人が一時的に訪問するとか、ニセコに長く居住するようになったと言われている。ニセコ町の観光開発を積極的に行ったのは、オーストラリア人中心の外国人であるが、この動きにニセコの町も積極的に取り組むようになり、今日では多数の外国人が居住したり、観光で訪れるようになり、ニセコ町に多くの外国人が居住するとか、訪問するようになっていると言われている。今日、ニセコ町に多くのインバウンドや日本人観光客が訪れる状態になっているのは、初めに雪質に注目しスキーを楽しむ場所として、今日では多数のインバウンドをニセコ町に呼び込んでいる立役者は、初めは雪質にほれ込んだ一人の外国人で、ニセコを海外に積極的に紹介したからであると言われている。今日、ニセコ町は年間を通して、多くのインバウンドが訪れる町として発展を続けている。^{注3)}

次に、ニセコと同様インバウンドの取り込みに成功しているのが、長野県白馬村と言われている。白馬村は八方尾根、岩岳、梅池高原といったスキー場があることから、冬場はスキー、夏場は避暑地として、現在、白馬村もニセコ同様インバウンドが大変多く、彼らに大変人気がある場所と言われている。今日、白馬村は、ヨーロッパや中国人など外国人が多く、長く居住している人が多いと言われている。彼らは使用されなくなった別荘や古民家を購入して生活を

している。飲食店では、ニセコ同様日本語のメニューと同時に、英語や中国語のメニューが置いてあり、多くのインバウンドが飲食に利用している。地元の人々は季節によってはインバウンドの来客数が多く、地元住人はインバウンドの存在をそれほど気にかけていないようで、むしろインバウンドの客が多いことを歓迎しているとの事である。

一方インバウンドにとり白馬村は大変住みやすく、仲間も多いので、彼ら同士の交流もかなり多いという。住民はインバウンドが空き別荘や古民家を購入して、住む事にあまり抵抗がなく、少子高齢化が進み地元の日本人の若者が都会に出てしまい寂しいので、地域にインバウンドが住むと活気が出てくる事から歓迎しているようである。地元のホテルや飲食店でカタコトの日本語で接客をするインバウンドも多く、地元での労働力不足を彼らが補っている。すなわち白馬村では地元のスキー場などで働いてくれるインバウンドが、労働力を補完していると考えて評価しているようである。白馬村の人々はインバウンドの受け入れに抵抗が少ないといえる。また日々の生活で、ホテルや商店でも必要な外国語の取得に積極的な人も多数いるとの事である。一方インバウンドは日本の不動産会社に別荘や住宅の運営・管理を任せて、母国と白馬村での二重生活を楽しんでいるようである。白馬村のような外国人定住者の増加は、ある意味で日本の人口減少を緩和する役割を果たしているといえる。白馬村はインバウンドに愛され、活気のある村となっている。白馬村と同じような光景が、近年、他の地域でもぼつぼつ見られ、外国人定住者が増加している場所が、徐々に増加していると言われている。

この他に近年、温泉を活用してインバウンド誘致を効果的に行っている戸倉上山田温泉、それに丹波の篠山市や、瀬戸内海では竹原市の大久野島「別称うさぎ島」、また紙幅の関係で詳しく記述できないが、四国の山間地であるのにインバウンドが多く訪れ有名な祖谷溪谷など、そのほかにもインバウンドの誘致に成功している場所がある。しかしその数はまださほど多いとは言えない。

ところで上述した、インバウンドの取り込みに成功している地域での成功理由を調べてみると、ある共通要素の存在がある。

これらの地域に共通する要因の一つは、例えば、四国祖谷の例で見ると、この地域に出生時から長く居住している地元の住人が、地域の森林や地域の自然の素晴らしい景観、それに地元の萎びた温泉などの良さをごく当たり前と考え、地元では長年その良さに気が付かず、看過してきた自然の景色や温泉の素晴らしさを、その地を偶然訪れた外国人が、その自然の景色や温泉の素晴らしさに注目し、祖谷の素晴らしさに魅せられて、その土地に長期に定住して、地元の人たちと協力し地域の観光開発に努力する一方、その場所のすばらしさや魅力を、NSNで積極的に外部に発信するなどの活動をした事から祖谷が注目されはじめ、今日では多数のインバウンドが訪れる場所になったと言われている。このように自然の素晴らしさを改めて評価

して、そのことをSNSを活用し、積極的に発信している外国人が存在しているのである。彼らはその地域に住み続けながら、自分が満足している地元の景色、温泉、その場所や地域の自然が持つ素晴らしさに関し、その良さを彼らの仲間や他の外国の多くの人々に、積極的に伝達する働きをしている。またそれをNSN等の情報でその地を知り訪れてくるインバウンドも、その素晴らしさに感動しその同感者として、次々にSNSでさらに情報を拡散する。その連鎖でインバウンドがその地を次々と訪れる。ところでこのように彼らが定着し生活する者が多い地域や、場所には共通に見られる点がある。それは彼らがその地域に長期に定住し、その核となって地域の良さをSNSなどの使用で、その良さを積極的に外部に拡散に努力をする外国人が存在しているのである。彼らは出身母国に限らず世界中の人々に、彼らが発見した魅力ある場所を、様々な方法でその地域の良さを、飾らずに正直に発信し、多くの仲間に積極的に伝達する行動をしているのである。彼らの多くはインバウンドとして来日、その地域の環境に遭遇して魅せられてその地に長く滞在し、同時にインバウンドが求める地域の真の情報を発信している。その情報に魅かれて来日するインバウンドを、その地域に取り込んでいく作用が働いている。すなわち彼らが好む環境を自ら作りだしている。それが成功の原因であると言える。現在、インバウンドの誘致に取り組む努力をしている自治体は、この事実を理解して同じことができる環境を創造する事である。インバウンドの誘致に必要な核は、インバウンドで訪れ、そこに自分達が満足できる居住環境を彼ら自身と住民の力で作り上げ、発展させている場所である。多くの外国人が素晴らしいと認める場所や地域には、必ずそこに中核として活動する外国人が存在している。また同時にこれらの地域の人々は、外国人が居住することにアレルギーを持たないか、少ないという共通した特性を持っている。

これとは逆にインバウンドの受け入れに成功しない場所は、同じ特性を持っていると言えるようである。すなわち①インバウンドに対して言葉が通じないから接客が不可とはじめから考え敬遠する。外国語や外国人に対し強いアレルギーを持っている。②インバウンドの食事は自分達と大きく異なるので、それを提供するの難しい。または不可能である。外国人には地方の鄙びた田舎の食事は、受け入れられないと考えている。特にイスラム教徒などは特有な食事制限があり、それが分からないから無理である。③このような地域では大多数の住人は、初めから外国の言葉は理解できない。外国語習得は困難と決めつけている。またインバウンドの要求、特にクレームに対処不可能と信じている。④自分達と考えや習慣が違う、加えて外国人は自己主張が強いので、何か失敗や事故が発生すると、訴訟に持ち込まれるので恐ろしい。④初めから外国語(言葉)は難しく理解できないので、外国語が出来る人の支援がなければ受け入れは困難と決めている。⑤インターネットなどは難しく全く理解できない、SNSなど扱えないので発信が出来ない。結局インターネットは使用不可能なので当然利用しようとしない。⑥誰

か支援者がいて、手取り足取り面倒を見て、助力する人がいないと何も出来ない。例えば、役所や公的機関が手足を取り支援しないと何もできない。要するに他力本願で自ら何もしないし面倒である。他力本願で自主的活動に初めから熱意を示さず、寄らば大樹の考えが強く、甘えが強く全てのことに消極態度をとる等々である。

以上のことから、インバウンドをその土地や地域に、積極的に受け入れる際に基本的に必要なことは、最低限でも住民は初歩的で簡単な外国語（英語）を話す努力をする。ごく簡単な会話を理解できる必要がある。そのためにごく簡単な英語などを使用して、インバウンドとごく簡単な会話ができる人を育てる必要である。また自分たち自身で簡単な語学を習得に努力する。また簡単な日常の事をサポートしてくれる組織や、団体を自らの力で探し出し、適切な指導とアドバイスを受けながら、徐々にでも語学習得の自助努力をすることである。

次に、自分達が日々見慣れた景色や生活環境は、初めて接する外国人にとっては、それには異なった見方や魅力があり感動する事実があるので、その事をまず理解する事である。インバウンドが自分達の日常生活の何に関心を持っているのかを、早く把握し理解する事である。重要なカギはインバウンドが自分達の地域に再び訪問して来たら、彼らを積極的に取り込み、その地域の真の情報発信者、協力者として活動してもらう。そして自らの地域にさらに多くのインバウンドを誘致するための、サポーターとして地域のために活動ができるよう積極的に支援することである。

インバウンドが現在多数訪れている場所や地域には、要約すると共通の特徴が必ずあると思えるので、改めてその要点を述べてみたい。

その地域の景色や環境を心底から好きになり、自らがその地域を他の外国人に向けて情報発信するとか、来訪者に積極的にその土地の良さを紹介する核となるような外国人の存在が大きなカギとなる。

しかしインバウンドがその地域や環境を、本当に好きになる地域や土地を好きになって多数訪れるようになるためには、その景色や環境に居住する人々と、その地域の自治体や宿泊施設、観光業者が最初にこの事の真意を理解して、インバウンドが求める景色や環境を提供する熱意と努力が必要である。他力本願では何事も成功しない事を理解して行動する事である。国の政策に乗っかり、付け焼刃でインバウンドを一時的に誘致する方法では、到底成功は望めない。インバウンドを自治体で取り込み活用するには、単に国の観光政策と補助金に便乗して、その場しのぎに彼らを誘致するのでは、その試みは到底成功しないと考えられる。インバウンドの誘致に必要なことは、来訪者の誰にでも親切に、暖かく接することである。例えば四国のお接待のような、心温まる接触と交流ができるように心がけて、インバウンドに優しく接することである。

そのための有益な方法は、観光客を一時的に観光客として受け入れるのではなく、ニセコや白馬それに祖谷地域など小論で取り上げた地域のように、その土地に満足して繰り返し訪れ、可能な限り長期に滞在して、インバウンド自身が本当に納得して地域の特徴や、感動したことについてインターネットを使用して、積極的に常時海外に発信してもらい、世界中の国からその土地を訪れ、その良さを納得してもらって、これらの人々にも同じように地域の情報発信者として、また長期に滞在して中核となる人々を増加させることである。一回限り訪れる観光客でなく、その地域の魅力を発信しながら長期的に居住して、その地域の眞の良さを伝える人になってもらうことが大事である。それらのことが本当のインバウンドをその地域に長期に根付かせることになる。

4、秋田市や東北6県のインバウンド招致活動について

上でも述べたが、秋田市観光課で秋田市と東北6県のインバウンド招致に関する説明を受けた。これは観光庁が東北地方6県にインバウンドを積極的に誘致する計画を立てており、具体的には東北6県見るもの・食べ物・買い物100選の発信をして、東北地方の祭り、景勝地・郷土食・地酒など地域を代表する観光資源を選定した「東北6県見るもの、食べ物、買い物100選」について、官公庁や日本政府観光局のウェブサイトを活用して、国内外に向けて情報発信をしている。またツーリズムEXPO ジャパン等のイベントにおいても情報発信をしている。さらにこの動きを加速するために、東北観光復興対策交付金による重点的な支援も実施している。またホストタウンの推進及び海外への情報発信の支援。観光産業を確たるものとして、国際競争力を高め、我が国の基幹産業にしたいとの政策を推し進めている背景がある。

このような政府の積極的かつ具体的なバックアップ政策がとられているにもかかわらず、現実には秋田市を含めて東北6県を訪れるインバウンドの数は、全国的に最も低い状態にあるので、東北各県ではインバウンドを増加させる方策に、日々真剣に取り組んでいると同時に、各県において県単位と同時に東北6県全体で、インバウンドの招致に全力取り組んでいるとの説明であった。

確かにこの説明の通り東北6県の各自治体では、少しでも多くインバウンドを受け入れるために協力するとか、独自に努力を重ねていると考えられる。それでも東北地方は交通の便が悪く、有名な観光地も少ないので、国内の観光客も他と比較して少ない。そのような場所にインバウンドを引き付ける誘因は多くないかもしれないと考えられる。

しかし、上で取り上げた、ニセコや白馬それに祖谷地区などの例を見てみると、それらの地域は有名な観光地とか温泉場ではなく、ごく自然なとりわけインバウンドを積極的に引き付け

る場所ではなかった。それらの土地は長く居住している人々がとりわけ注目すべき場所でもなく、土地の人々には魅力に富んだ場所ではなかった。しかしその辺鄙とも言える自然環境に魅せられた外国人に評価されて、今日多数のインバウンドが魅せられて訪れ、彼らに満足を与えている観光地となっている。この事を考えてみると東北地方には、このようにインバウンドが魅力を感じ、沢山訪れてくる地域が沢山あるのではないかと筆者は考える。

東北地方にインバウンドを誘致する方法として、東北の自然を評価してそれを SNS など海外の仲間や、世界中の人々にその良さを積極的に伝達してくれる外国人を見つけ出して、その人達と協力してインバウンドを招致することが、問題の解決策になるのではないかと筆者は考える。とはいってもこのことを成し遂げるためにはそれなりの心構えと、努力が必要になることも事実であると考えられる。

現時点でインバウンドの訪問が少ない東北 6 県ではあるが。将来、多数のインバウンドを呼び込むためには、我々が日常生活で見過している自然や景色、それに人の温かさによって、多数のインバウンドが訪れるようであるが、それにはまず初めに東北地方の各地で現居住者ではなく、外国人自身が魅力を感じる場所を探しあてる火付け役のインバウンドを見つけ出し、彼らと協力してインバウンドが納得して訪れ、居住してくれる場所や地域を見つけ出すことである。

東北の人々は素朴で、心が温かいと多くの日本人が昔から評価している。東北地域には、他の場所では体験できない、素朴さと人の温かさがある。そのことがインバウンドに伝わっていけば、将来、インバウンドが東北地方を訪れ、東北地方に居住を希望したいと考える人が多くなると考える。そのようなことが実現するならば、秋田や東北 6 県に現在気が付かれずに埋もれている場所や土地がかなり沢山あり、インバウンドばかりでなく国内からも訪れ、その地に居住や永住を希望する人たちが沢山いるのではないかと考える。そのことが事実であることが、すぐに証明されると考える。

秋田や東北地方はインバウンドばかりでなく、まだそのことに気が付いていないが、我々日本人にとって観光や居住するための宝庫であると筆者は考える。

もしも、秋田や東北各県にインバウンドが多く訪れ、インバウンドが訪れた各土地のすばらしさを評価して、インバウンドがその土地を好み、より長く居住できる環境を創造していけば、彼らはその土地により長期に滞在するようになり、ニセコや白馬、祖谷などのようにその土地を第二の故郷と考えるようになってくれれば、東北地方は現在過疎化が急速に進んでいるので、この地域の人口減少の歯止めとなり、長期的に見れば、将来的に彼らがそれらの地域を発展させる人材になると筆者は考える。

ところで秋田県や市を例にとると、現在、若者の人口減少の歯止めと産業振興のために、農

業を主体とする産業構造を六次産業化の方向に転換する努力をしており、また地域活性化の手段として、企業誘致を積極的に推進する努力を現在行っているとの説明があった。これらの計画を成功裡に推進していく手段として、まず初めにその人材を確保する必要があると考える。しかし現実を見ると少子高齢化が急速に進み、地元の産業を支えていく若者を中心とした人材が、急速に枯渇する状態が続いているようである。

地域の産業を支えるために不可欠で、かつ消費活動の中核となる人口が、地元秋田でも減少傾向にあるとの説明を受けた。この傾向に歯止めをかけ地域を活性化するために、秋田では人材が特に必要とされているとの説明もあった。今日、急速に減少する人口と、我が国産業を支える労働者として、外国人を特定技能労働者として受け入れる動きが現実化している。我が国では特に中小企業や農業分野で、それを支える人材を必要としており、今後、現時点で受け入れた労働者を、より長期間産業の主な担い手として活用する動きも現実化している。筆者はこの深刻な問題の解決手段の一つとして、インバウンドが長期間地域に定住することにより、ニセコや白馬でみられるように、将来的に各地域の経済活動を支える生活者の構成員となり、各地域に長期に滞在して地域居住者となれるように制度を変更して、徐々に地域の企業で働ける環境にするなら、技術や言語、生活習慣に問題もなくなり、将来的には居住地のメンバーとして、一定の期間の定住が可能になるようする。さらに希望するなら将来日本に長期に居住して、我々と共に生活する地域の構成員として生活していける存在に導くべきであると考え。現在考えられている単に労働力不足を補う単純低賃金労働者としてではなく、地域に長期定住して人口減少の歯止めの役割も果たす構成員として、受け入れて行くようにすべきではないかと筆者は考える。将来過疎に苦しむ地方や地域で、インバウンドもコミュニティの主なメンバーになり、人口減少でコミュニティが消滅するのを、防ぐ要素となれる事にしたらいと考える。そのことが現実となるための対策を考えたら良いと考えている。

将来そのことが実現することを筆者は願っている。そのためには今後各種の法律問題を解決する困難な作業が山積していると考えられるが。過疎に苦しむ地方や地域で、インバウンドもコミュニティを支えるメンバーとなり、人口減少によりコミュニティが消滅するのを防ぐ要素となれるような対策を早急に考えると良いと考えている。

5、結びに

訪日外国人が近年急速に増加している地域の主な要因を挙げてみると、インバウンドの誘致に成功していると考えられる地域には、共通要素があると考えられる。すなわちそこには地域の景観や地域の人びとの生活環境を自ら体験し、外国人特有の視点から評価し、その土地を最

適な居住場所と考え移り住み、関心を持ったインバウンドが訪れてきたら、宿泊可能な設備を探す手伝いをする。また自らその地域の住民と積極的に交流する機会を作り、来訪者に必要なサポート体制を築く努力をしている外国人が存在している。さらに彼らはその地域の情報や魅力を SNS などで積極的に発信する活動もしている。またその外国人は常に誘致活動の中心となり行動している。そして彼らが積極的に活躍する地域には、例外なく多数のインバウンドがその誘致情報を基に、多数訪れて賑わいを見せている。

これからインバウンドの誘致を積極的に考えている全国の市町村は、ここで述べたようにインバウンドの招致活動の中心には、その核となり活動する外国人が存在していることを真に理解し、まずは地域の良さや特徴、素晴らしさを理解・発見して活動する、またその中心となり積極的に活動する外国人を真剣に探し、全面的協力を依頼し中心となり活動してもらうのが、今後インバウンドを招致する主な鍵であると考え。しかしインバウンドを招致する主体は、あくまでもその土地の住人である。他力本願でなく自らのインバウンドに対する考え方や、インバウンドを真心で受け入れるための心構えと行動様式をまずは理解し、身に着ける事がまず基本的に必要な事である。将来、我が国にインバウンドが多数訪問するか否かは、我々がインバウンドをどのように考え、接していくかがそのカギとなる。

注

注 1) 最近の訪日外国人数と訪日外国人増加の要因、政府の強力な観光政策の推進。アジアや東南アジアの国々の人々に対する visa 要件の緩和。世界的な和食ブームやアニメの普及により日本に対する関心が高くなり日本ブーム現象が起きている。世界的に景気が良いのと目安効果が考えられる。

注 2) 政府の地方にもインバウンドを招く政策については、観光白書が参考になる。いくつか例を挙げてみると、国際会議の開催。国際展示会の開催。東京、大阪、京都などの国際観光都市の外に積極的に世界遺産の認定を取得したりして、全国の地方自治体にインバウンドを誘致する政策を推進するための様々な施策を積極的にとっている。

我が国政府は、1963年に観光基本法を制定して、我が国の観光を拡大・促進する方針を立て観光に取り組み始めたが、さらに2006年観光立国推進基本法を制定して、我が国のさらなる観光の拡大を目指した。その結果近年インバウンドが急速に増加し、我が国のインバウンドは、2017年度の外国人旅行者数は2,869万人（対前年比21.8%増）で過去最高を更新した。因みに2015年度の外国人旅行者数1,974万人、2016年には2404万人であり、毎年連続で過去最高を更新している。2018年には3000万人を超し、政府は2020年のオリンピック開催年为目标に、さらにインバウンドの増加を目指す活動を継続しているので、さらなる増加が予想され、今後もその拡大傾向が確実に続くと予想されている。

注 3) 町のホームページによると、ニセコ町は、古くから北海道内の温泉観光地として知られ、高度経済成長期には、モイワスキー場、アンズブリ国際スキー場が開設されるなど、倶知安町のニセコグラン・ヒラフと共にスキーリゾートとして脚光を浴びるようになった。その後、途中にバブル経済などの影響を受けながらも、昭和50年代後半からはペンションの急増や、スキー場、ホテル、ゴルフ場などの建設が進んだ。また平成8年ごろからはアウトドアや体験事業など地域の特色を生かした事業に取り組み、夏季の観光需要が大きく伸張した。近年は、ニセコ地域の雪質の良さがオーストラリア人スキーヤーを中心とした外国人にも知られるようになり、スキーを目的とした冬季の外

国人観光客が増加している。また、夏季にはアジア地域からの観光客が増加して、ニセコ地域は国際観光地として注目されている。そのために開発や投資が活発化している。しかし国内外の観光客のニーズに対応しきれていないといった多くの課題を抱えている。そこで町ではこのような追い風や、課題などさまざまな事象を考慮しながら、観光振興のみを実現するのではなく、地域全体が活性化することを目的に計画を策定している。町が目標とする姿はいつ訪れても心身ともに健康で元気になれる、まただれもが共感し充実できる悠悠(ゆうゆう)リゾートにする努力をしている。ニセコ町では、「四季を通じた美しい自然や景観、遊び」、「信頼できるおいしい食」、「あたたかく迎えてくれる人々」などを確立し、来訪者に対してにじみ出る感動やスローライフの充実感を得ることができる癒しの空間を提供するリゾート地を目指している。

参考文献・資料

2018年度「観光白書」 観光庁。

ニセコ町、白馬村の「ホームページ」。

北前船日本遺産推進協議会 “北前船” 2018年。

秋田市 北前船寄港地「あきた」をめぐる」秋田市観光文化スポーツ部 観光振興課、2018年2月。

秋田だ！「秋田県観光総合ガイドブック」秋田県観光文化スポーツ部 観光振興課、2018年2月。

秋田市観光ガイド“旅トモ”(公財)秋田観光コンベンション協会、2018年7月。

秋田県にかほ市“日本遺産荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間”にかほ市商工観光部観光課、2018年。

佐藤良知“秋田県の産業経済動向と産業振興施策について”2018年7月。

秋田県産業労働部“秋田県経済データファイル”2018年10月。